

あとがきに代えて
／各章の要約

仮に設けた一年の募集期限が近づきました。投稿論文数 15 編は予想以上、未知のテーマを簡単に論じるに何とか足りる数ではないでしょうか。各章で取り上げられた論題を以下に要約して、一応の中締めと致します。

*

「1章 道端のベンチが・・・(都市のインテリア序章)」

皮切りをつとめる論文らしく、代表的ケースとしてベンチを選び、ただモノに過ぎないベンチが市民の快適な居場所へと進化するステップが、先達の研究を引用しつつ語られています。

「2章 Please Take A Seat! どうぞ座って (玄関先のベンチ)」

アムステルダムの小運河で見つけた、市民側から街に提供された玄関先ベンチのケースが取り上げられています。都市のインテリアとは一般に公共空間の私的利用を指すので、真逆のケースとして貴重です。

「3章 一緒に座る (公園ベンチのアフォーダンス)」

小公園の〈座れる物体〉から発見された様々なベンチ的な機能 (アフォーダンス) の調査記録です。ベンチ以前のベンチ、あるいは脱ベンチのデザインや計画学につながると面白い。

「4章 一緒に食べる (レストランで見つけた大テーブルのアフォーダンス)」

個食派に「社会復帰」を期待する意図で設けられた、3章の続編です。筆者らはアレクザンダー的理想主義を当てはめて深読みしていますが、レストラン側にはそのような (個食を解消しようとする) 意図はなさそうです。

「5章 寓居ミュージアム (蔵カフェミュージアムでタイムスリップ)」

どの街にもある旧家を開放して街の記憶をたどってみようーとの提案です。柳井のある蔵カフェは、先代が遺したお宝を「何でも鑑定団」でニセモノと認定され、その故事によって人気を博しています。

「6章 木陰の値段 (木陰ベンチの経済効果)」

公園ベンチに木陰が欠かせないこと、木陰には維持費がかかること、そしてその経済効果はーと問うていますが、執筆の趣意は引用文の中にあります。日本人が照葉樹 (いわゆる雑木林) の木陰に風流を感じるようになったのは明治近代以降とのことと

か。国木田独歩の「武蔵野」に、その顛末が記されています。

「7章 共有される道 The shared street (公と私のはざまで)」

都市のインテリアとのテーマが着想された尾道坂の町のデザインサーベイ記録であって、この共同研究の主章といえます。共有される道 The shared street とは人とクルマの共存を唱える都市計画理念を指すので、クルマを完全に排除した坂の町は該当しませんが、歩行者の街を誇張表現した実験的街路として尾道は貴重なケース、生活の細片がちりばめられた閉ざされた視界が<都市のインテリア>を形成するとの趣意が述べられています。当然視界が開けていると思われた山ノ手を横断する農道には、下の住宅り住民によって見下ろしを防ぐ立派な塀が巡らされていたとの意外な事実が披露されています。

「8章 ディテールが作る街（尾道斜面地住宅の建築マナー）」

前章で紹介された細街路にちりばめられた生活の細片の大部分の主（ぬし）である住宅の建て方敷地利用の類型化が試みられています。とはいえ、今日の斜面地の分譲宅地のように設計条件が標準化されない、自然地形そのままの利用なので、類型化しても千差万別との結論が得られるだけです。そこで設計条件をそのまま受け取って自然な反応を示す建て方を建築マナー（作法）と呼んで、都市のインテリアを模索するテーマとの整合化を図っています。建築マナーの中には庇の下に椅子をおいて通行人をもてなす例もあれば、また反対に塀、石垣を巡らせ門扉を高く掲げて格式を誇示する例もあります。今日の通行人観察者にとっては、その対比（昔の住まい手の正直さ）が面白いわけです。

「9章 環境行動を科学する（思い、考え、そして試す）」

環境の意味とその形成過程の理論化をライフワークとするエイモス・ラポポートの代表的著作「構築環境の意味を読む」(The meaning of Built Environment) の、編集者による改題です。Built Environment とは Building Environment の研究ではないとする建築家・研究者の自負を示す表現ですが、監訳者・高橋鷹志氏（前日本インテリア学会々長）はこれに構築環境なる訳語を当てて対象を広く一般化する工夫をしておられますので、都市のインテリアを研究するわれわれには好都合です。ハンドブック仕立ての著作なのでどこからでも読めますが、真に読み解くべきは。ラポポートが永年続けてきた「思い」「考え」「試す」研究スタンスの方であるように思われます。

「10章 街をデザインする（ほおずき通りの街路灯）」

執筆者の大学が所在する街は高級住宅地として一目おかれた地域でしたが、買い物動向の変化によって商店街はさびれ始めていたとのこと、本編は街起こしの活動報告です。20年前から「ほおずき市」と称する浅草風の夏祭りが開かれ、「ほおずきスタンプ」による割引きが定着しているという。このレポートは街興しの第三弾、「ほお

ずき通り」の街灯灯のデザインです。思い、考え、試し、そしてデザインする—究極の研究課題ではないでしょうか。

「11章 都市のスキマ空間／都市市民の古くて新しい居場所 “The Great Good Place”」

ビッグプロジェクトが停滞して見直されるようになったスキマ空間の開発利用、都市のインテリアビッグスリーの一角—といえるのではないのでしょうか。執筆者によって思いつく限りの事例が紹介されており、不勉強者には便利です。何らかの規制緩和が必要に分、当事者の責任が増し、利用者には独特の緊張感が感じられて心地よいのでは。